

家族と家族幻想 4

坂口 伊都



結婚して夫婦になる時、出産の時は家族が増える、離婚、死別では家族との別れがある。その変化は、とても大きな出来事だと感じる。

実は家族が一人増えたり、別れたりすることは、精神的に大きな影響が起こることで、簡単なことではない。

暑い夏が過ぎ去り、急に肌寒くなりました。コロナ禍で、何をするにもマスクがあるからなのか、大笑いするような事が減ったような気がしていま

す。ハレの日が息を潜めているようです。寒くなり、またコロナの感染者が急激に増えてきました。今年の年末年始はどのような装いになるのでしょうか。

10月末に立命館大学主催のフォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座で娘と養育里親家族の体験について話をする機会をいただきました。里姉の体験を聞くことは珍しく、多くの方の関心を引いたようでした。話す機会をいただくと、娘とゆっくり話す時間が生まれ、いろいろな想いが言葉になっていきます。里子と離れ暮らすようになってから、面前で話をするのは今回が初めてなので、話しをしていく中で何を感じとっていたのか確認する作業にもなりました。

娘は中学生の時、周りの親戚や教員である大人達が、里親制度を自分で調べようともせずに親ではなく、聞きやすいに娘に里子との生活はどうかを無責任に尋ねてくることで大人不審になったそうです。後になって信用していない大人が、「実子として欲しい支援は何ですか」と聞かれることがあっても、それをまず自分で考えてからこんなや

り方はどうだろうかと尋ねて欲しいと言いました。娘が周りの大人たちに里子との生活を聞かれ、しんどい思いをしていたことに気付けなかった私も娘の大人不審に一役買っていたのでしょう。娘の一言ひとことに身につまされますが、大事な視点をもらえていると感じます。

大人不審になった娘ですが、話をする場に行けば、様々な大人に可愛がってもらっています。今回も中村正先生とパソコンを覗き込みながら、楽しそうに話をしていました。その姿は、親子のようで、見ていて笑ってしまいました。本人は、どれぐらい気付いているかわかりませんが、信頼できる大人も周りにいて、その大人達からいろいろなものを吸収しているのだなぁと感じます。

この連載の前に「養育里親～もうひとつの家族～」を連載していました。我が家に来てくれた里子は、小学4年生の時に我が家の一員になりました。慣れない環境に入り、戸惑うことも多かったと思います。児童養護施設では、自分のモノか違うかがシンプルにわかります。それが家庭になると、自分のモノと誰のモノか決められていないモノが溢れています。里子の興味を引くモノを家の手の届く所にあり、そのモノを里子の手元に持ってきて隠すということが続きました。そのモノを自分の所に持ってきてはいけないのだろうと思っ

ているから、隠すのでしょう。里子は、モノを持つことで自分の存在を確かめようとしているのも伝わっていました。暮らしていく中で、この家そのものが里子を刺激してしまっているように見えました。

りましたが、落ち着いた時期もありました。それは、特別支援中学校1年の後半でした。担任の先生が、里子へ共通の対応をできるようにするためにケース会議をしましょうと提案し、児相、放課後等デイサービス等の地域支援機関の方、そして我が家も父母で参加しました。里子の存在を受け止めながらも社会のルールを伝えていくことを確認し、大人たちが里子に示すルールや線引きがずれないように話し合いました。里子自身も自分の事で話し合う日があること知っており、学校でも放課後等デイサービスでも「〇〇日に俺の話をするんやろ」と話していたそうです。大人達が自分の事を観ていてくれているという実感が持てたようで、その頃は行動化せずに落ち着いて過ごせていました。

その体制が崩れたのは、年度が変わり、担任や担当が変わった時でした。引継ぎが上手くできず、やっと落ち着いたのも束の間、築いてきたものがいとも簡単に壊れてしまいました。

学校と家庭とでの線引きが崩れ、里子にとって何が良くて、何が悪いのわからなくなり、行動化が加速していきました。そこに自由度が高い家庭の生活の中で、嫌なことがあると逃げだしてなくなるということ等も加わり、警察に捜索の相談に行ったこともありました。次から次へと問題が拡散していくような日々となっていきました。大人達の足並みがそろわないことで、里子の問題も大きく膨らんでいき、この環境下で里子を守ることに限界を感じ、別れて暮らす決断をしました。日々を過ごすことも大変でしたが、里子と別れば楽になれるわけではなかったです。里子のこと



を想いながら過ごすことは変わりません。残った家族で外出に出ても、ここも里子と一緒に来たね、あそこにも行ったねという話が自然と出てきますが、その後が続きません。里子に何もしてやれない非力さを思い知らされるだけでした。一緒に生活をするということは、生活の至る所にその子の面影を感じるということでした。家族を失うこと、それは言葉にできない痛みが伴いました。

娘との話の中で、里子を迎えた時も里子を手放した時も私達家族にとってとても大きな出来事だったよねと話題になりました。確かに家族が増える結婚や出産、家族と別れる離婚、死別等は大きなことだ。里子にも全く同じことが言える。簡単ではないことを改めて実感しました。

人生は、ずっと続いてその中で
様々な出会いや別れがある。
もちろん、いい事ばかりがあるわけ
ではない。どうしようもなく辛い
こともある。でも、辛いだけで人生
が終わるわけではない。

里子とは、講座で話す1週間ぐらい前に再会した。家を出てから顔を合わす程度のことは2回ありましたが、会って話せたのは今回が初めてでした。

里子と離れる時、担当ワーカーにこの先も里子とのつきあいを続けていきたい、この子の応援団

として居続けたいと思っていることを伝えていました。里子と離れて暮らすようになり1年が経ちました。知的障害児施設に入所になって5か月経った頃、この子の誕生日だったので何かできないかと担当ワーカーに相談をしました。私達家族の存在が里子にとってある方がいいという考えを伝えてくれましたが、慎重に進めたいと言われました。まずは手紙から始まりました。そこから2か月後に会う日が決まりました。ですが、前日に里子が他の子とのトラブルが発覚し、その対応をしなければならぬという連絡が入ったとことでキャンセルになりました。里子は、次の日に私達が来ることは知らされていなかったそうです。前日キャンセルを聞き、落胆しました。いつの日か会えるのだろうか不安になりましたが、一月後に再度日程調整をしました。

いつキャンセルの連絡が入るのではないかと落ち着かない気分でしたが、施設に行く時間になりました。久しぶりに会えるので、何かお土産でも持って行きたい気持ちになりましたが、モノにまつわるトラブルが多かったので、あえて体一つで会いに行くことにしましたが里子は、私達夫婦を受け入れてくれるのでしょうか。

最初の30分は、里子の担当の職員の方と児相の職員の方と話をしました。里子が担当職員の方にきつく当たる時があるようで、「愛情表現だと信じたのですけどね」と話している姿を見て、今はこの人が里子を育ててくれているのだなと感じました。里子のやんちゃぶりは健全なようですが、その方の優しい眼差しから、里子が今までいろいろな人に可愛がられてきた部分が、職員の方を優しい気持ちにさせているのでしょうか。

学校帰りの里子が照れくさそうに登場しました。ジーンズのほつれた部分を触りながら話を聞いて、照れくささを隠す仕草は私の知っている里子そのままでした。マッチングで会った日のことを思い出し、懐かしさに包まれました。慣れてくると、自分の部屋と畑を見せると里子が言ってく

れました。これは、この子なりのおもてなしです。私達が来たことを喜んでくれているのが伝わりました。ワーカーさんが、「次も来てもらう？」と里子に尋ねると大きく頷いてくれました。

里子に受け入れてもらえて良かったなと思うと同時にマッチングの頃とは違う立場であることを再確認する気持ちになりました。マッチングの時は、距離感を縮めていくために会うことを重ねていましたが、今回は細く長くつきあっていくための距離感を持ち続けることが大切なのでしょう。里母から里祖母になったような気がします。

この話を聞いて、中村先生は里子が坂口家の縁取りの中に位置づいているのがわかると話し、そして支援者は行政用語を安易に使わない方がいい。その時だけを見て成功したとか失敗したとか言うべきではないだろうと語ってくれました。その言葉を聞いて、許された気持ちになりました。この1年間ずっと重い十字架を背負っていましたが、下ろしてもいいのかも知れないと思えました。里子が里親に会って喜んでくれたことと中村先生の言葉は、止まっていた私の時間を動かしてくれました。里子との別れを経験しても仕事も家事もしていましたし、笑ったり泣いたりもできていました。でも、ある部分の時間が止まっていたようです。

いつももっと他の選択肢を選ぶことはできなかったのか、里子が落ち着いて生活できているのか、私は里子に辛い思いをさせてしまっただけなのではないかという思いが離れませんでした。里子と担当職員さんの様子や里子の表情を見て、良かったねと思えました。里子の行動問題を落ち着かせるためにできることは、この刺激が溢れている家から離れることだろう。大人として、責任を持ってこの子を守る方法だと信じ、決断をしました。それでも、他の選択肢は本当になかったのかと自問自答してしまいます。自分が前に一步踏み出すのにも誰かの手助けがなければできません。対人援助職が存在する根幹は、ここにあるように思います。

家族とは何だろう。

血の繋がりでだけでは語れない繋がりがあ

「あなたの家族は？」と尋ねられて誰を思い浮かべるだろうか。どうしているか気遣ったり、元気でいて欲しいと願ったりする誰かを家族だと思っている私がいるのなら、その相手は家族なのだろう。



里子との生活は、いろいろありました。里子は、我が家に来るまで家庭での生活を知らずに育ってきました。モノだけでなく家で当たり前のようになっている食事の時の席やその家庭内での暗黙のルールは、わかりにくいものです。その中でどう立ち振る舞えばいいのか、何をしても良くて何はダメなのか、一つひとつ確かめなければわからなかったのでしょうか。家庭で育つことが子どもの最善の利益だと叫ばれていますが、家庭で暮らせればそれだけで子どもが幸せになれるわけではないことを学びました。

それは家庭の方が良いとか悪いということではないだと思います。家庭にも弱点があるのは事実です。その子にとって落ち着いて過ごせる場所は違います。家庭という枠を設けるのが難しい場所で里子が落ち着くためには、周りにいる大人が足並みを揃えられるかどうかか鍵でした。思春期の年齢に入り、足並みを揃えられてもこの先一緒に暮らせたかどうかはわかりません。里子と暮らした日々の中で私たちが家族と認識してくれたのかどうか不安でした。里子と再び出会い、何も持たない私たちを受け入れてくれました。里子にとって、私たちは家族として認めてくれたのかもしれない。

改めて「家族」とは何だろうと考えました。里子とは、お母ちゃんからおばあちゃんの距離感に変わりました。里子を他人とは思えなかったのが、私の中でも家族として居続けています。日常的に共にする家族ではありませんが、離れていても自然と考える相手や家族と捉えているのだと感じます。



生きていく中で家族に変遷が起こります。私の場合、大学進学で離れて暮らしましたが就職は地元でと言われ、実家にもどりました。就職をして5年目に原家族から自立することを決め、家を出ました。いつまでも子どもの立場に置かれ続けようとすることに抵抗したのだと思います。そして、夫と出会い新たな家族を作り、息子と娘が生まれました。息子は成人を迎え、家を出ています。里子は家を出るには早過ぎましたが、いつかは自立していく存在です。これからは、その距離感を意識しながら出会っていったらなと思います。